ソフォクレスの悲劇「オイディプース王」の冒頭

テーバイ。オイディプース王の宮殿前。中央に宮殿の大扉、前庭の祭壇のあたりに老幼の市民からなる嘆願者たちが集まっている。オイディプース王、宮殿より登場。

オイディプース　　テーバイの人々よ、古きカドモスの子等、新しい家族たちよ。
テーバイが、かくも祭壇の煙と、祈りと、悲しみの声に満ち溢れている時、
嘆願の小枝を手にして集まったのは何のためか。
私はその訳、人を使わして聞くのではもの足らず、
みずから、いま、ここに現れた。
私こそ、オイディプースとて名高き者。
さあ老人たちよ、一同に代わって告げよ。
何故お前たちはここへやってきたか。
不安にかられてか、望みを抱いてか？
語るがよい、どんなことでも、喜んで力を貸そう。
お前たちの苦しみを目の前にして手をこまねくほど無慈悲な私ではないつもりだ。
司祭　　われらが王、オイディプース、ごらん下０さい。
この通り、遠くへとび立てぬ幼子も、腰の曲がった老人も、私のようなゼウスの司祭も、それに選ばれた若者たちも、みんなここに集まっております。
そして残りの者どもは嘆願の小枝を手に手に捧げ、
広場に、パラスの神殿に、イズメーノスの予言の廟に群がっております。
と申しますのも、ご承知の通り、テーバイは今や苦しみの渦中、
死の荒波ににうちひしがれ、
田畑の実りは見るかげもなく、牧場の牛はやせおとろえ、
女は陣痛に苦しみながらも子供を産まず、
その上、疫病は焔のように拡がり、カドメイアの家々を廃墟となし、
ただハーデスに、あの闇の世界に呻きと涙が増えていくからなのです。
市民たちを伴って私はここに参りました。
それは、あなたに神と同じ力がある、と考えたからではなく、
ただあなたが、人の世のまつりごとに、さらに人と神とを諸々のまつりごとに、
すべてに秀でたお方だと信じたからでございます。
あなたはこのカドモスの国にこられて、あの恐ろしいスフィンクスの謎から
私どもをお救い下さいました。
それもあなたはただ一人、何の手引きも助けもなく、
ただ、神の加護によって、われ等を救われたのです。
すべての者が等しく仰ぐ偉大なる王オイディプース、
ここに跪いてお願いいたします。

神々の御告（みしるし）を頼むにせよ、人間の英知にたよるにせよ、
どうか、今一度、私どもに救いの道をお与えください。
今となっては、経験深きお方の考えだけが、ただそれだけが、
最後のよりどころでございます。
人の世でこよなく優れたお方、オイディプースの名誉にかけて、
どうぞ私たちの街を繁栄に導いていただきたい。
今やテーバイはあなたを救い主として仰いでおります。
それがひとたび栄はしたものの、後に空しく没落してしまったなどと言われぬ様に、
どうか、どうか、固い礎を築いて下さい。
輝かしい兆しと、過ぎし日のしあわせ、
それを今一度われらにお示しください。
後々までも変わらずに、この街を統べ給うならば、
うつろに息絶えた街ではなく、いのち、息吹に溢れた街を。
城も、船も、住む人なくして一体何になりましょう。

オイディプース　哀れなる人々よ。
その願い、その苦しみ、私はみんな知っている。
だが、お前たちの苦しみも、
私の苦しみほど大きくはないはず。
お前たちの悲しみ、苦しみは、身に限られて決して他には及ぶまい。
しかし私は、おのれの、お前たちの、そして全テーバイの、
ありとある苦しみを、この肩ににない耐えて行かねばならぬ。
お前たちにより眠りが醒まされたわけではない。
すでに幾度か涙を流し、迷いの道を歩んだ挙句、思いついた唯一の手段（てだて）、
それは既に実行に移している。すなわち、
メノイケウスの子、妻の弟クレオーンを、ピューティアのアポローンの
神殿に遣わして、いかなる言葉、いかなる業で
私が国を救えるか、伺わせているところなのだ。
月日を指折り数えてみると、もう戻って来ねばならぬはず。
クレオーンが返って告げる神のお告げが、たとえどんなものであろうと
すべての力でそれを果たす。
もしそれを怠るならば、
その時こそ私はテーバイの敵とののしられよう。

（東京大学ギリシャ悲劇研究会の上演台本より）